光で照すと水が清らかに湧くと云はれ，支那では弓の名人「羿」と云ふ人の妻で美人の嫦娥が良人の祕藏の不死の靈藥をぬすんで月に飛んで行つたら，その罰で蟇になつてしまつたと云ふ話がある．

印度の傳說である「月の桂」とか「兎と月」とかについても噴き出すやうな珍談がある．太古，帝釋天が老翁に化けて狐と猿と兎の許を訪ねた．すると狐は鯉に，猿は果實にと，めいめい御馳走を出したが，兎は相憎く何の馳走も持ち合せしなかつた．兎はそれを苦に病んで遂に自分のからだをたべてくれと云ひ殘して火中に飛び込んだ．帝釋天はその俠骨と純美な心情に感激して，兎の死骸を月に捧げたとのことから，月と兎の話が生れたのである．

また，月の中に五百丈の桂の木があつて，その枝を一人の仙人が伐りはじめたが，彼が下界に在るときの罪から，いくら切つても伐りつくせなかつたと云ふ「月の桂」もこれが始まりである．

（月の圖の殘りは來月號に）

月の表情美を探る

近代的な月見をやらうと云ふ世話人たちの主催で花山天文臺見學が企てられた．滿月より二三日前の方が絕好の表情美を示すと云ふので去る1933年九月廿九日の夕暮，一行約卅名自動車に分乘して天文臺に向ふ．

花山は京都の街から云ふと恰度，圓山と將軍塚山の背後の松山で，高さ 220米，山科の町を眼下にしてゐる．自動車は松林を切開いて作つた恐しく急峻なジグザグの山道を，乘つてるものをハラハラさせながら，そのまゝ頂上の天文臺の前迄一氣に來てしまふから便利なものだ．

こゝ迄上ると空氣が晩秋のやうに冷めたく爽かに澄み切つてゐるのをハツキリ感じる．（後できいたのだが，市內より氣溫すつと低く，金澤あたりの氣候とそつくりの由）建物は圓蓋堂のついた本館，別館，子午儀室，太陽觀測室の四つ，皆眞白だ．本館は例のメンデルスゾーン作「アインシタイン紀念塔」を想はせる鐵筋コンクリートの建物，前に白亞の三角測量塔が水のやうな空に聳えて，夕月をお手玉にとつてる，と云つた近代風景で，感覺をそゝる畫面を構成してゐた．

本館圖書室で秋葉理學士より山本一清博士を紹介され，博士より當天文臺の由來，現狀，目的に就て一時間近く講話を謹聽，それから別建になつてゐる子午儀室に行つて正確な地方時を標定する子午儀を見學，測量者の體溫の影響から狂のこないやうに寒中に煽風機をかけて體溫を散らすとか，毛髮一本絡まつてゐたゝめ十萬分の一の差が出たとか，「精微そのものゝ」の樣な機械の性質に關するエピソードが，およそ門外漢の私達には興深かつた．

それから本館に戻つて正確な電氣時計の裝置拜見．それから愈々待望のドーム樓上の望遠鏡室に入る．みんな初めてで子供らしい好奇心で一杯だ．博士が助手も使はず自らスヰツチを切るとギーときしる音と共に徐々に圓蓋が開いて，現れた秋の夜の蒼穹，危ぶまれた雲が切れてメダルのやうな月だ．日本一と云ふ口徑30cmの眼視式屈折望遠鏡を代る代る窺く．200倍の月の顏の明るさ，輝いたクリーム色に點々と散る紫紺鮮かな火山帶の陰影，その次に見た土星の輝ける環をもつた姿が異樣に美しい．皆なガリレオへの嘆賞を新にした樣な美感に打たれてしまつた．

一同厚く博士の厚意を謝して辭す．歸りは月影をたよりに裏山を下つて圓山公園の方へ出た．此の山路の夜は大都會の中心まぢかとは思へないやうな幽邃さであつた．(A)